

二人の依存症者

道徳的責任の理由反応性説を擁護する

井保和也(京都大学)

ある行為者がある行為の道徳的責任を負うための必要条件は何だろうか。1960年代までは、次の別可能性原理(PAP)が多くの論者の支持を集めていた。

PAP: ある行為者がある行為の道徳的責任を負うのは、その行為者がその行為とは別の行為をすることもできる場合に限られる。

つまり、PAPによれば、道徳的責任にとって重要なのは、実際にする行為とは別の行為をすることができること、すなわち、別可能性を持つことなのである。

しかし、フランクファートが、1969年の(悪)名高い論文の中で、別可能性を持たないにもかかわらず道徳的責任を負う行為者の事例を提示したことによって、PAPの支持者は目に見えて減った。そして、フランクファートの影響を受けてPAPを放棄した論者のほとんどは、その代わりに、現実連鎖説(ASV)を支持するようになった。

ASV: ある行為者がある行為の道徳的責任を負うのは、その行為者がその行為をある特定の仕方でする場合に限られる。

つまり、ASVによれば、道徳的責任にとって重要なのは、行為者が持つ別可能性ではなく、行為者が行為する実際のプロセス、すなわち、現実連鎖なのである。

とはいえ、一見してASVは不明瞭である。「ある特定の仕方」とはどのような仕方なのだろうか。ASVの支持者はどのような種類の現実連鎖が道徳的責任にとって重要であるかをきちんと説明しなければならない。この点については、ASVの支持者の中でも議論が分かるところだが、現在では、理由反応性説(RR)と深層自己説(DS)の対立が議論の中核を成している。

一般に、RRは次のように定式化される。

RR: ある行為者がある行為の道徳的責任を負うのは、その行為者がその行為を行う十分な理由が存在するすべての可能世界のうちの、適切な数の可能世界において、その行為者がその理由を認識し、その理由から行為する場合に限られる。

例として、健全な人物であるアンが意図的に禁止薬物を服用する場合と、薬物依存症であるベスが抗うことのできない強迫的な欲求に駆られて禁止薬物を服用する場合を比較してみよう。おそらく、直観的には、アンには薬物を服用したことの道徳的責任があるが、ベスにはない(あるいは、アンよりも軽い道徳的責任しかない)ように思われるだろう。RRはこのことを次のようにして説明することができる。アンは薬物を服用しないのに十分な様々な理由に反応することができる。例えば、もし目の前に警官がいれば、もし自分の今までのキャリアが無駄になることをきちんと考慮していれば、もし薬物が高価であれば、アンは薬物を服用しなかっただろう。しかし、ベスはアンほど多くの理由に反応することができない。たとえ目の前に警官がいても、たとえ自分の今までのキャリアが無駄になることをきちんと考慮していても、たとえ薬物が高価でも、ベスは薬物を服用してしまう。RRによれば、理由に対する反応の違いが、道徳的責任の違いを生むのである。

その一方で、DSは次のように定式化される。

DS: ある行為者がある行為の道徳的責任を負うのは、その行為がその行為者の深層自己を表現している場合に限られる。

「ある行為がある行為者の深層自己を表現する」とは、極めて大雑把に言えば、「ある行為がある行為者の価値観と一致する」ということである。今度はシンディとドーラという二人の人物を考えてみよう。シンディとドーラはどちらも薬物依存症であり、抗うことのできない強迫的な欲求に駆られて禁止薬物を服用する。しかし、二人には重要な違いがある。シンディは享乐的で、自身の強迫的な欲求を容認し、薬物を服用することを楽しんでる。その一方で、ドーラは薬物に手を出したことを悔いていて、自身の強迫的な欲求に抗っているが、薬物を服用することを止められず、絶望している。この場合、直観的には、シンディには薬物を服用したことの道徳的責任があるが、ドーラにはない(あるいは、シンディよりも軽い道徳的責任しかない)ように思われるだろう。DSによれば、この道徳的責任の違いを説明するためには、薬物の服用という行為はシンディの価値観とは一致するが、ドーラの価値観とは一致しないという事実を目を向ける必要があるのである。

RRは、フィッシャーとラヴィッツァ、ウォレス、マッケンナ、サルトリオといった数多くの支持者を獲得してきた。その一方で、DSは、フランクファートによって提示され、ワトソンによって体系的に展開された後は、それほど多くの支持者を獲得することができなかった。しかし、この5年ほどの間で、スリパダがDSを支持する複数の論文を相次いで発表し、その中で、RRを退け、DSを擁護するための強力な議論を展開している。

スリパダによれば、RRを退け、DSを擁護する上で重要なのは、すでに挙げたシンディとドーラという二人の薬物依存症者である。くり返しになるが、直観的には、自身の薬物依存症を楽しんでいるシンディは、薬物を服用することの道徳的責任を負うように思われるが、自身の薬物依存症に絶望しているドーラは、薬物を服用することの道徳的責任を負わない(あるいは、シンディよりも軽い道徳的責任しか負わない)ように思われる。DSは行為者自身の本当の価値観というアイデアに訴えることで、二人の道徳的責任の違いを適切に説明することができた。しかし、スリパダの見立てでは、RRはこの違いを適切に説明することができない。なぜなら、シンディとドーラはどちらも薬物依存症であるため、薬物の服用を中止する十分な理由に反応することができないという点においては、二人を区別することはできないからである。すでに述べたように、RRによれば、理由に対する反応の違いが道徳的責任の違いを生む。したがって、RRは薬物依存症ではないアンと薬物依存症であるベスを区別することはできるが、そこから一歩進んで、薬物依存症を楽しんでいるシンディと薬物依存症に絶望しているドーラを区別することはできないのである。

本発表において、発表者は以上のスリパダの議論を退け、RRを擁護することを試みる。発表者のこの試みは、次の二つの段階から成る。第一段階では、スリパダのDSはシンディとドーラの間にあるように見える道徳的責任の違いを説明することに成功していないことを示す。第二段階では、シンディとドーラの間には道徳的責任の違いがあるという直観が生じる原因を特定し、その作業を通じて、この直観が誤っていることを示す。これらの段階を通じて、RRは、スリパダの議論とは裏腹に、シンディとドーラを区別しようとしていないという点において、むしろ正しい方向を向いていることが示されるだろう。